

本書は1979年の初版発行以来版を重ね、多くの読者から大変高い評価を受けている。初版以来、実に25年の歴史を重ねている、わが国の医学書のなかでも希有な存在である。この本を入門書として愛読され、現在は内科医、循環器専門医、あるいは専門ナースとして臨床の第一線で活躍している方もたくさんおられることであろう。第4版では図版が全面改訂され、新知見が追加されている。

なぜ、この書がこれほどまでに、多くの方に長く読み継がれているのであろうか。心電図の学習を困難にさせている理由は、人の目には見ることでできないきわめて微量の電気現象を三次元的に理解しなければならないからである。心筋細胞の電気現象が、心臓の働きとどのように関係しているのか。病気の心臓では、電気現象はどのように変化するのか。あるいは人の体に異常が発生したときに、心電図にはどのような変化が起こるのか。心電図だけを勉強しても、これらの疑問には答えることができない。解剖学、生理学、生化学、病理学、ひいては臨床の豊富な知識があって、初めて理解できるのである。この本は初心者のために書かれた心電図の入門書ではあるが、心臓病学についての入門書としてもお勧めの書である。

まず、この書は実に読みやすい。解剖学、生理学、生化学などの知識をもとに、心臓と心電図の関係をわかりやすく解説している。心電図の波形は大きく、きわめて鮮明である。日常の診察にすぐに役立つ臨床のヒント、解剖図、心音図、脈派や圧波形、時には漫画を使用し、多くの日常的なたとえを

引きながらの解説は、心電図アレルギーの人々にも大変な福音ではないか。心電図をそんなに難しく考えないで、皆で楽しく勉強しよう。

さあ、長椅子やベッドに寝転びながら、心地よい音楽を聞きながら、気楽に心電図、心臓病の勉強をしようではないか。著者のそんな言葉かけが今にも聞こえてくる。日本と米国の医師や医学生、看護師、歯科医師、その他一般の人々に対する豊富な教育経験からであろう。著者の面目躍如たるものがある。James教授、White医師、Burch教授ら現在の循環器病学の基礎を作られた大家との交流のエピソードは、著者から受ける個人レッスンである。

臨床に携わるすべての人が理解し、マスターし、日常的に使いこなさなければならない言葉に三種類ある。患者さんの病歴としての「日常語」(spoken language)、バイタルサインや徴候としての「身体語」(body language)、心音や心電図などの「臓器語」(organ language)である。改訂第4版に際して書かれた著者の序文の中のこれらの言葉からも、著者が世界的な第一級の臨床医であることが理解できるであろう。心電図学は学問としての歴史も長く、世界的な名著も多い。この書は、心電図として、心臓病学の入門書として名著と呼ぶにふさわしい。初心者だけでなく、心電図を勉強した人がもう一度知識を整理するための書としても広くお勧めしたい。

(A4変型判 272頁 定価3,360円(本体3,200円+税5%))
(2004年 医学書院 刊)